

群 教 セ	F09 - 01
	平17.231集

生徒の自信や意欲を高めさせる工夫

—— 担任・教科担当・部顧問の連携を通して ——

特別研修員 鈴木 宏和（太田市立商業高等学校）

《 研究の概要 》

努力するのは嫌だが、良い結果は出したいという生徒の大半が、学習面などでよい結果も残せず自分に自信をもてないという。そこで本研究では、「担任・教科担当・部顧問」とチームを組み、連携を図りながら、部活動への取組を中心に意欲化を図っていった。また、勉強への取組方などについて生徒に合った方法を考え、少しでも良い結果を残せるようにするための支援を工夫した結果、生徒の自信や意欲を高めることができた。

キーワード 【教育相談 部活動 考え 自信 資格取得 検定】

I 主題設定の理由

最近の生徒の傾向として、努力せずに楽をして良い結果を出したいと考えているように見える。現実にはそのような態度で結果が伴うことはなく、かえって自分に自信をもてない生徒が増えているように思われる。そこで、地道な努力の大切さに気づかせ、自信をもたせていくための支援の在り方について研究していくこととした。

例えば、ふだんは明るく元気で服装などもしっかりしており宿題なども忘れずやってくるが、成績が伴わないためか自分に自信がもてない様子が見える生徒がいる。

自己肯定感が低く、「自分はできない」という思いが強い。自分を守ろうとするためか、教員の指導を受け入れることができない場合がある。

そのような生徒に自信をもたせるためには、本人が好きでやっている部活を中心に、努力を認めたり、目標達成を支援したりするのが一番良いと考えた。

部顧問は生徒の考えをよく聞き、少しでも本人の良いところを見出してほめる指導を心がける。生徒との信頼関係を大切に、良い結果を出して成功体験を積み重ねることが本人の自信につながるのではと考えた。そのためには、部顧問や教科担当と連携を図りつつ、部活だけでなく、学習面や生活面から支援することも重要になる。

このような支援を具体的・継続的に行うことを本研究の主題とした。

II 研究のねらい

生徒の好きな部活動でやる気を起こさせるため、部顧問をはじめ教科担当にも協力をお願いする。まず部顧問に生徒との信頼関係を作り直してもらうことから始め、大会などで良い結果を得られるよう努力させることで、生徒の自己肯定感を高めていく。

また、教科のほうでも、多くの検定試験に挑戦して資格を取得することが進路実現に近づく道であることを理解させ、自信を付けさせていきたいと考える。

III 研究生徒の概要

部活を中心に指導するというところで、4月始めに部活について生徒と面談をしたところ、現在の状況は以下のとおりだと話した。

1年次の1学期に、部顧問に対して分からない所を質問した際、強い口調(怒っているような)で説明されたため、質問するのが嫌になって、顧問に何か言われても答えないようになった。そのことをきっかけに、顧問はあまり話しかけないようになり、生徒としては自分は無視されているのではないかと感じるようになった。そのため部活に出るのが嫌になって、夏休み終了から3学期始めまで休部した。しかし、休部してみたものの、自分1人で練習しても成果があがらないことを感じ、1月の半ば頃に、ほかの人より短い練習時間という条件で、部活に復帰することになった。

IV 研究計画

表1 月別計画

月	指導内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・学年統一基礎力テスト（担任） 結果について、生徒と話し合う。 ・二者面談（担任・部顧問） 生徒がどういう気持ちで部活に望んでいるかを聞き出し、顧問に伝え良い方向に向かわせる。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・中間考査（担任） 勉強への取組方を考えさせる。
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・部活大会（部顧問） 大会の結果から、本人の部活への取組方を考えさせる。 ・検定試験（教科担当） 授業中、生徒がどれくらい理解しているかを確認し、理解していないようであれば、補習などを行う。検定に合格させる事により、努力すればできるようになる事を理解させ、少しでも自信を付けさせる。
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・期末考査（担任） 中間考査同様、勉強する習慣を付けさせる。 ・部活練習会（部顧問） 他校の生徒と友達になるようにさせ、他所の部活の練習状況などを分からせる。 ・部活大会（部顧問） 良い結果を目指すのはもちろんのこと、他校にたくさん友達を作るようにさせ、大会に出場する楽しさを増やす。
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・部活大会（部顧問） ふだんの練習の成果が反映されているか確認し、話し合いをもつ。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・検定試験（教科担当） 検定に合格させ、少しでも自信を付けさせるため、理解していないようであれば、補習などを行いやればできるようになる事を分からせる。 ・部活試験（部顧問） 検定試験2週間前より、練習を

	検定対策に切り替え、少しでも上達できるよう頑張らせる。
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・中間考査（担任） 勉強への取組方を確認する。 ・部活大会（部顧問） 結果について、話し合いを持ち次回はもっといい成果が出せるようにさせる。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・部活試験（部顧問） 検定試験2週間前より、練習を 検定対策に切り替え、前回より上になれるよう頑張らせる。
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・期末考査（担任） 勉強への取組方を確認する。

（注）部顧問・担任を中心に話し合う機会を随時設ける。

V 指導経過

1 4月

(1) 学年統一基礎力テスト

（担任）

結果を返す際、生徒に今回の結果について、どう感じているかと聞くと、結果は悪かったが、いつものことだからどうということはないという。特に気にしている様子はなくあきらめているように見える。

また、学年統一基礎力テストのアンケート欄には、「成績が悪いのはしかたがない」と記入してあったので、生徒に少しずつでもいいから勉強をすればできるようになることを指導したところ、何をどうやって勉強したらよいか分からないと言う。

そこで、ふだんの授業で分からないところがあったらそのままにしないで、教科担当若しくは友達でもいいから質問をし、その場で理解していくように話した。それから、家で少しずつでいいから予習をするように話し、勉強する習慣が重要であることを伝えた。

(2) 二者面談

（担任）

2年生になって生徒との二者面談を行った。その時に、1カ月が過ぎたのでクラスに慣れてきたか、また部活動は頑張っているかと聞いてみると、クラスには慣れたが、部活動については、自分の思い描いていた（ほかの部員や顧問と楽しくやる）

イメージとは違って、練習ばかり厳しくて楽しい部分がなく、技術面でも練習の成果が見えないので面白くないと感じているという言葉が返ってきた。

部活動が嫌なのか、それとも練習するのが嫌なのか、どちらでもなければ練習内容について顧問に相談したらどうかと話す。すると、部活自体は嫌いではないから続けたいし、辞めたいとは思わない。ただ、1年の時に分からない所を質問したら、強い口調(怒っているような)で説明されたため質問するのが嫌になってしまった。それ以後できるだけ話さないようにしているので、話したくないと言う。

そこで、気持ちが入っていないのであれば技術も上達するわけがないということと、顧問に話さなければ、解決しないだろうし、今のまま続けていても上達は望めないで、自分から顧問の先生に話をすることを提案したが、今のところ言わないでほしいという返事であった。

(担任の考察)

生徒は、話さなくてよいと言ったが、顧問には生徒が今どのような気持ちでいるのかを伝えて、生徒の気持ちをいくらかでも考慮しながら対応するようにしてもらうことで、よい方向に向かえればと考える。

2 5月

(1) 中間考査

(担任)

勉強をする習慣がついていないので、中間試験1週間前より生徒に科目ごとの計画をたてさせ、勉強を始めるように指導を行った。

また、教科担当教員に、生徒が質問に行ったら教えてほしいと依頼したところ、教科担当は授業の時に、分からない点がある生徒は休み時間又は放課後、質問に来るよう話してくれた。しかし、この生徒は質問にはこなかった。

結果として、成績はあまりよくなかった。生徒とすれば自分なりに勉強したようだが、やはり勉強の仕方が分かっていたようである。また、どこが分からないのかが分かっていたため、質問に行くことができなかつたと思われる。そこで、次回の試験からは、基本的なことが分からなくも、恥ずかしがらずにどんなことでもいいから質問するのが向上の早道であることと、そのために今回より努力を積み重ねることが大切であるこ

とを伝えた。

3 6月

(1) 部活大会

(顧問)

一年を通して一番大切な大会が1週間後に迫ったので、生徒に今までやっていた練習から、大会に向けての練習に切り替え、各自で調整しながら練習をするよう指導した。

結果としては、ほかの部員は昨年より良い結果を得ることができた。しかし、この生徒は自分なりに調整を行い練習をしたにもかかわらず、昨年同様悪い結果に終わり、すごくがっかりしているようであった。

部顧問は、4月に担任から生徒の気持ちを聞いていたため、今まで本人のやりたいようにさせてきた。しかし、このままやりたいようにさせると、来年も同じ結果になると考えられるため、この生徒に対して、ほかの部員と同様に、分からない部分は顧問に質問するようにしたらどうかと提案した。その際に、今回の結果を踏まえてどういった練習がしたいのかを確認したところ、このままでいいという返事であった。

(部顧問の考察)

まだ、昨年の事を引きずっているようなので、部顧問としては無理に変えさせず、いましばらく様子を見る事にした。ただ、大会で結果を出すことができなかつたことは本人もすごく気にしており、何とかしたいという気持ちは伺えるので、しばらく期間をおいてもう一度話をしようという方針を立てた。

(2) 検定試験

(教科担当)

6月に入り検定試験の1週間前となったため、授業での理解度を確認したところ、あまり理解をしていない様子が見られたので、検定に向けての補習を行うことを伝える。すると、積極的に参加し、自分が分からないところを質問するようになった。ただ、分からないところを質問するのは良いのだが、質問の内容が4月の始めにだれもが理解していると思われる内容であった。そこで、今後はふだんの授業で分らなかつたら必ずそのままにしないで、その場で質問するなり、後で聞きに来て理解をするように指導した。

(教科担当の考察)

まじめに補習へ参加し、自分なりに質問などを

するなど前向きに努力したためか、検定試験に合格することができて、とてもうれしそうであった。努力すれば、できるようになることが少しは分かったようである。生徒に少し自信が付いたように見えるので、このことを顧問に伝え、指導に生かしてもらおうことにした。

(3) 部顧問と生徒との話合い

(部顧問)

教科担当より、努力した結果検定に合格したことを聞き、まずその話題から入り合格した事をほめる。その後、部活にも全く同じことがあてはまることを伝えた。分からないところをそのままにして質問に来なければ、上達しないのではないかと確認をしたところ、素直に先生の言うように分からないところを質問するようにしたいと話した。予想外な返事であったが、素直にはっきりと答えることができた。

また、翌日、今であれば素直に聞き入れてくれると考え、ふだんの生活態度（服装・あいさつ・行動）についても、部顧問として気になったところは注意していきたいと思うが、言ってもよいかと確認したところ、気付いたところがあれば、どんどん注意してください、おかしいところはできるだけ直していくようにしたい、と素直な答えが返ってきた。

(部顧問の考察)

前から本人も、質問しなければ上達しないことはよく分かっていたようであるが、教科担当による補習をまじめに受け、質問することにより、検定試験に合格できた。これをきっかけとして、頑張ればできるようになることに気付き、だいぶ自信を付けて自分を良い方向へ変えようとしている様子が伺える。

4 7月

(1) 期末考査

(担任)

顧問から、努力して検定に合格したという「成功体験」を得たことで、生徒の気持ちが前向きに変わったと聞いたので、検定の時の勉強と同じように早めに取り組みで頑張るよう話してみた。すると、早めに学習に取り組み始め、教科担当のところへ質問に行っているようであった。

(担任の考察)

努力をするようにはなったが試験の結果は、そんなによくはならなかった。やるべきことが絞り

込まれている検定では、それだけに集中し努力することができたようだが、期末考査のように科目数が多いと、まだうまく対処しきれていない。今後、少しずつ複数のことができるように指導していきたいと考える。

(2) 部活練習会

(顧問)

夏の大会が近づいてきたので、他校の生徒と一緒に練習することにより、自分の力がどの程度のものか知ってもらいたいと考え、他校の生徒と合同練習を行った。その際、他校の生徒とも積極的に交流して部活動の様子などを話すことにより、技術面の向上だけでなく、考え方がより一層豊かになることを期待し、まずは他校の生徒と仲良くなるように提案した。

生徒は他校の生徒とすぐに仲良くなり、いろいろと話をし、部活動や練習に向けた態度などについて得るものが大きかったようである。また、先日の検定以降気持ちを入れ替えたためか、今まで以上に上達しており良い結果を残すことができたので、よく頑張ったとほめたところ、うれしそうであった。

(部顧問の考察)

大会の雰囲気味わってほしいと思い、他校の生徒と一緒に練習することにしたが、他校の生徒とうまくやっていたらどうか、又自信をなくしたらどうしようかと不安であった。しかし、気持ちを入れ替えて練習をしてきたことでよい結果を出せ、また一つ「成功体験」を積むことができたと思われる。生徒が少しでも上達したら見逃さずほめることが、自己肯定感を高めるために有効であることが確認できた。

(3) 部活大会

(顧問)

先日の練習会の事を考えると、期待できそうであるが、大会前にあまり言うとプレッシャーになり、良い結果が出ないと思われるので、気楽にやってくるように話した。やはり、練習会と違い大会になると緊張するようであり、思ったように動けず、期待していた結果が出せなかった。

大会終了後、まずは生徒にどうだったか感想を聞いたところ、思ったとおりの結果が出せなかった原因は、本人も良く分かっていたようである。そこで、良くなかったところは簡単に注意し、良かったところをたくさんほめるようにした。

(顧問の考察)

やはり大会では緊張して、思ったような結果が出せなかったが、生徒も自分のうまくなかったところが分かっていた。次回はどこを直したらよいかも分かるようになり、そこを変えていきたいという姿勢を見せられるようになったことが大きな進歩だと考える。

5 8月

(1) 部活大会

(顧問)

前回の大会の経験から、この生徒は特に本番で緊張することが分かったので、大会1週間前より今からやる練習が本番のつもりでやるようにとプレッシャーをかけて練習させ、本番の時は練習のつもりでやるよう指導した。しかし、練習の時に、本番のつもりで緊張して行う事はできたようであるが、いざ本番になるとやはり緊張してしまい、前回以下の成績に終わった。

大会終了後、生徒にどうだったか感想を聞いた。前回よりは、緊張はしなかったようであるが、まだ本番になると、うまくいかないと言う。今回も、本人は反省しているようなので、うまくいかなかったところは追求しないで、良かったところを探してほめるようにした。

(2) 部顧問と生徒との話し合い

(顧問)

一時上達したが、また伸び悩んでいるように見えるので、休みの日の練習時間を今までの倍近い練習時間に増やしてみないかと提案したところ、二つ返事で、「はい」と言い、前向きだった。

(部顧問の考察)

今までだったら、嫌な顔をするか、「嫌だ」と言うところであるが、いろいろな大会で他校の生徒と話をし、他校と比べて甘かったということを経験したのではないかとと思われる。

6 9月

(1) 検定試験

(教科担当)

部顧問から話を聞き、気持ちがだいぶ前向きになっていることは分かったので、今回も検定前に補習を行うことにした。強制ではなく、不安な人は来るようにと話してみたところ、自分から積極的に参加をしてきた。しかし、試験前日の最後の補習には出てこなかった。残念ながら、今回は検定には合格できなかった。

本人は、だいぶ前向きになってきたようであるが、この生徒には、まだ最後の詰めには甘さがあるのではないかと考える。顧問にもこのことを伝達した。

(部顧問)

生徒に、検定が駄目だったのはなぜだろうかと聞いてみるが分からないと言う。そこで、前回の検定の時は半強制であったため出席したが、今回は強制ではないからとあって、最後の補習に出なかったという自分の中の甘さが原因ではないかと話をしたところ、生徒も気持ちの甘さということに気付いたようで、次回からはそのようなことがないように頑張りたいと意欲を見せた。

(2) 部活試験

(顧問)

1週間前から試験に向けての練習に切り替える。入学以来、試験には受かっていない。前向きに取り組み始めて最初の試験となったが、受からなかった。しかし、本人は悔しそうで、次は何とかしたいということ言葉を表すようになった。

(部顧問の考察)

今まで、結果が悪くても次は頑張りたいといった言葉がなかったが、自分から声に出して頑張りたいという前向きな意欲が感じられた。

7 10月

(1) 部活大会

(顧問)

最近、本人のやる気が見えてきたので、特に細かいことは指示せず自由にやらせてみたところ、結果は伴わなかったが、次の大会までに何を修正すればよいか自分で分かるようになった。

(2) 中間考査

(担任)

今までと同様に、計画を立てて勉強するように話したところ、すでに計画を立てて勉強を始めており、勉強面でも前向きさが伺えた。

8 11月

(1) 部活試験

(顧問)

今回の試験は、期末考査3日前に行われる。本来、定期考査1週間前は勉強を頑張ってもらうため部活動禁止であり、各自が家で練習をしておくように指示したところ、前回の悔しさを覚えていたのか、検定まで少しの時間でいいから練習をさ

せてほしいと、前向きな姿勢を見せた。

VI 考察

1 部顧問

(1) 生徒の言い分を聞く

まずは生徒の言い分を怒らないでよく聞く機会を増やすようにして、生徒が今どういった気持ちでいるのかを「自信や意欲を高めさせる支援の工夫」という観点から把握しようとするのが有効であった。

(2) 生徒の考え方を把握する

生徒の言い分を聞いたならば、内容の良し悪しは別として、なぜそのようなことを言っているのか考えるとともに、1人の意見で解決しようとせず、担任や教科担当だったらどのように考えるか、幅広い視点から検討していった。

(3) 生徒への対応

担任や教科担当の先生の意見を聞いたならば、その意見を参考に考え方を整理して生徒に話しかけていった。

(4) 生徒との信頼関係を築く

生徒に話しかける際、今までの経緯があることを頭において、生徒の反応を確認しながら話していった。生徒の表情が明るくなり、こちらのお話を素直に聞けるようになるまで、あきらめず(1)～(3)を繰り返し行った結果、改善が見られた。

(5) 大会や検定で良い結果を残せるよう指導

上記(4)までを繰り返し行い、信頼関係を築いた上で、技術面などを丁寧に指導した。

2 教科担当

(1) 授業態度

授業中、隣と喋って聞いていない場合、叱るのではなく、聞いていないと分らなくなるということをお話させた。また、そういったことがあった場合は、担任や部顧問にも情報提供して、一貫した指導を行った。

(2) 授業理解

定期考査前や、授業で分からないところを質問にきた場合、納得できるまで丁寧に指導した。

(3) 資格取得

検定試験の前に、理解していないようであれば補習などを計画して検定試験の資格を取得できるよう指導し、生徒に自信を付けさせていった。

3 担任

(1) 部活動

生徒に自信を付けさせるには最も良いのが部活動だと考えられるので、本人と面談した内容を部顧問に話し、まずは生徒との関係を良い方向に持っていけるよう話合いをもってもらい、良い関係になれたら少しでも本人のやる気を出させ自信を付けさせてもらうように依頼した。

(2) 授業

自分で教えている科目についてはもちろん、ほかの教科でも授業中は集中するよう指導した。また、ほかの教科についても分からない箇所があるようならそのままにせず必ず質問に行くように話した。さらに、定期考査の前などは計画的に勉強をしているか声をかけるようにして意識付けを図っていった。その際、教科担当などにも生徒が質問に行ったら、教えてもらえるように依頼した。

(3) 資格取得

検定試験前など、内容を理解していないようであれば補習などを計画し、検定試験の資格を取得できるよう指導し、生徒に自信を付けさせていった。また、授業以外の検定試験も紹介し、前向きに受験できるように促して、少しでも多くの資格を取得することで自信を付けさせるように心がけた。

(4) かかわり方についての考察

部顧問・教科担当と時々話合いを持ち、いろいろな情報を収集し生徒が間違った考え方などを行っているようなら注意を促していった。

生徒の考え方や行動について、無理に変えようとしても変わらないことと、1人の教員が指導しても変わらない場合は、ほかの教員と連携をとることが大切であると感じた。生徒のいろいろな場面での態度を話し合いながら指導することで、より多くの面から生徒にアプローチできる。それによって、生徒を多面的に理解して指導することができるし、そのような指導は有効であると感じた。

また、教員の対応の仕方では生徒のやる気は起きるということが分かった。今後は、こちらで当たり前のことだと思っても、なぜそういった行動をとるのかよく話を聞き、話し合いながら良い方向に持っていければと思う。話合いで結論が出なくてもあせらずに、距離を置いて様子を見ることも必要であり、少しでも生徒ができるようになったら、ほめるような指導をしていきたいと思う。

(担当指導主事 井上 淑人)